

昭和村立東小学校の歴史

明治 5 年 学制頒布

全国に小学校が設置された。

明治 6 年 糸井小学校設置 青雲寺を校舎にした。学校の費用は各村から。
生徒は、糸井村、貝野瀬村、生越村から 73 人。授業料 8 銭 3 厘

明治 8 年 貝野瀬小学校 池替戸観音堂に開設
生越小学校 恵光寺に開設

明治 18 年 糸井小学校が「北勢多郡第二小学校」となる。
第 1 分校：生越小学校
第 2 分校：貝野瀬小学校

明治 19 年 教育改革 義務教育制度の完成（国民の就学率 98%）

明治 22 年 糸井村、貝野瀬村の合併 → 糸之瀬村となる。
糸井小学校→糸之瀬尋常小学校本校
貝野瀬小学校→貝野瀬分教場
生越校は赤城根簡易科小学校となる。

明治 23 年 教育勅語

明治 26 年 小学校に高等科併設
貝野瀬尋常小学校独立

明治 27 年 糸井尋常小学校に高等科を新設（尋常科 4 年、高等科 4 年）
糸井尋常高等小学校校舎を新築（中宿）

明治 31 年 貝野瀬尋常高等小学校校舎新築。 **全戸から寄付を集める**

明治 41 年 長者久保分教場（後に赤城分教場）を新設（1～4 年） **地区民の寄付を集める。**

明治 46 年 尋常科 6 年、高等科 2 年となる

明治 40～43 年 **学校統合をめぐる争い**

糸井尋常小学校と貝野瀬尋常小学校の統合、郡や県の役人の調停を経て統合
糸井村が校舎敷地を寄付、貝野瀬尋常高等小学校を分校とする条件で合意

明治 44 年 現在地に糸之瀬村尋常高等小学校を新築

大正 14 年 公立糸之瀬図書館を併設

大正 15 年 新校舎建築を決めたが、数々の問題が発生し、建築までに 23 年要した。
政府の方針転換により財源確保困難。戦争の影響。

昭和 16 年 小学校は国民学校となる。 高等科 2 年も義務制となる。

大東亜戦争始まる。

赤城分教場→中野に移転。

昭和 19 年 東京の学童が集団疎開（志村第 5 小学校） 青雲寺、川龍寺

昭和 22 年 教育基本法公布 6・3・3・4 制スタート

糸之瀬村立糸之瀬小学校と改称。

同時に、糸之瀬中学校が発足。

昭和 23 年 現在の地に新校舎落成。

貝野瀬分教場廃校。

昭和 33 年 糸之瀬村と久呂保村が合併し昭和村が発足

昭和村立東小学校と改称。

昭和 35 年 東小学校赤城分校が大河原小学校として独立した。

昭和 36 年 生越小学校は昭和村に編入し、東小学校生越分校となる。

昭和 50 年 生越分校廃校となる。

平成 8 年 新校舎落成（現在の校舎）

特記事項

- ・学校が設立された明治初期には、授業料を徴収したが、それでも、子どもを学ばせたいと学校に通わせた。子弟教育への意欲が感じられる。
- ・分校建設に際し、地区民の寄付を募ってまで、地区内に学校が欲しいという熱意が感じられる。
- ・初期の学校建設や教育に係る費用を村から出し、村の将来を担う人材を育成しようという村の気概が感じられる。
- ・明治 40 年から 43 年、学校をめぐる争いがあった。学校の位置や設置条件をめぐり、県を巻き込んだの大騒動であった。いつの時代も、学校の設置場所については難しい問題である。
- ・学校めぐって数々の変遷があったが、その時々地区民の願いを反映させながらより良い教育を受けさせる方向に変化し、今の東小学校があると感じる。

昭和村立南小学校の歴史

- 明治 5 年 **学制頒布**
全国に小学校が設置された。
- 明治 6 年 川額小学校設置 雲昌寺を校舎にした。学校の費用は各村から。
生徒は 73 人。**授業料 銀 5 匁**
- 明治 7 年 森下小学校設置 遍照寺を校舎にした。
生徒は、森下村、椋久保村から 45 人。**授業料 銀 5 匁**
学校経営資金：村民の寄付。一戸 5～10 円 かなりの高額であった。
文明開化時代の教育への熱望
- 明治 8 年 椋久保小学校設置 千賀戸神社の舞殿を（現椋久保住民センター）に移して校舎とした
- 明治 18 年 川額、森下、椋久保 3 校を合併し、「北勢多郡第一小学校」となる。
本校：森下遍照寺
分校：川額雲昌寺
- 明治 19 年 **教育改革** 義務教育制度の完成（国民の就学率 98%）
北勢多第一北尋常小学校を森下村に設置
北勢多第一南尋常小学校を川額村に設置。
- 明治 20 年 北勢多第一北尋常小学校を「森下尋常小学校」に改称。
北勢多第一南尋常小学校を「川額尋常小学校」に改称。
- 明治 23 年 **教育勅語**
- 明治 25 年 森下、川額の両校を合併し、「久呂保尋常小学校」を設置。
- 明治 26 年 高等科を併置し、「久呂保尋常高等小学校」に改称。
- 明治 29 年 永井分校を設置。
- 明治 32 年 久呂保尋常高等小学校校舎新築。永井分校校舎新築。 **全戸から寄付を集める**
この膨大な校舎にいっぱいになる程生徒が集まるだろうかと危惧されるほどの立派な校舎であった。
- 明治 40 年 尋常科の修業年限が 6 年となる。
- 明治 46 年 尋常科 6 年、高等科 2 年となる。

昭和 16 年 小学校は国民学校となる。高等科 2 年も義務制となる。

久呂保国民学校となる。

大東亜戦争始まる。

昭和 22 年 教育基本法公布 6・3・3・4 制スタート

久呂保村立久呂保小学校と改称。

同時に、久呂保中学校が発足。

昭和 28 年 久呂保小学校赤城分校開校。

昭和 33 年 糸之瀬村と久呂保村が合併し昭和村が発足

昭和村立南小学校と改称。

村出身の実業家玉田徳太郎氏と弟の曾根光雄氏が、グランドピアノ、オルガン、テレビ、講堂暗幕等を寄贈した。

昭和 43 年 赤城分校廃校。

昭和 52 年 永井分校廃校。

平成 6 年 昭和村立南中学校跡地に南小学校新校舎落成。

特記事項

・学校が設立された明治初期には、授業料を徴収したが、それでも、子どもを学ばせたいと学校に通わせた。文明開化時代の子弟教育への意欲が感じられる。

・初期の校舎建築に当たっては、村民からかなり高額な寄付が集められた。教育に対する熱望が感じられる。

・明治後期からは、学校建設や教育に係る費用を村から出し、村の将来を担う人材を育成しようという村の気概が感じられる。

昭和村立大河原小学校の歴史

明治 5 年 学制頒布

全国に小学校が設置された。

明治 19 年 教育改革 義務教育制度の完成（国民の就学率 98%）

明治 22 年 糸井村、貝野瀬村の合併 → 糸之瀬村となる。

明治 23 年 教育勅語

明治 41 年 長者久保分教場（後に赤城分教場）を新設（1～4 年）

分校を作るには百戸以上が必要だったが、少し足りなかった。村では分校を作れないという。本校までは通学距離が長かったので何としても分校を作りたい願い、村当局に一切負担をかけまいと**地区民の寄付を集めて分教場を建築した。**

明治 46 年 尋常科 6 年、高等科 2 年となる

昭和 16 年 小学校は国民学校となる。高等科 2 年も義務制となる。

大東亜戦争始まる。

追分、赤谷 400 町歩が、東部第 41 部隊演習地となる。

赤城分教場→中野に移転。糸之瀬国民学校赤城分教場と改称。

昭和 21 年 終戦に伴い、農地開発営団による開墾が開始された。入植開始。

昭和 22 年 教育基本法公布 6・3・3・4 制スタート

糸之瀬村立糸之瀬小学校赤城分校と改称。

同時に、糸之瀬中学校が発足。

昭和 33 年 糸之瀬村と久呂保村が合併し昭和村が発足

昭和村立東小学校赤城分校と改称。

昭和 35 年 大河原小学校開校。（11 学級、児童数 351 名）

昭和 51 年 屋内運動場落成。

昭和 52 年 プール竣工

昭和 54 年 新校舎落成。

平成 21 年 創立 50 周年記念式典

平成 22 年 5・6 年複式学級

平成 27 年 校舎大規模改修

令和元年 創立 60 周年記念式典

令和 5 年 4・5 年複式学級

令和 6 年 2・3 年複式学級

特記事項

・ 長者久保分教場設置に際して、大河原地区民の寄付が集められた。

大河原地区に、何としても学校を作りたいという住民の熱い思いが感じられる。

・ 戦後、入植による開墾で大河原地区が発展し、地域文化の拠点・心のより所として分校があった。保護者の学校へのかかわりが強いと感じられる。

昭和村立昭和中学校の歴史

明治 5 年

学制頒布

昭和 22 年

教育基本法公布

6・3・3・4 制スタート

戦後の民主主義にもとづく、人間尊重の教育理念に沿った教育が始まり、小学校卒業後、誰もが等しく中学校に学ぶ単線型の教育六・三制がスタートした。

糸之瀬村立糸之瀬中学校が発足。旧兵舎を改築して校舎とした。

久呂保村立久呂保中学校が発足。久呂保小学校校舎の一部を転用した。

昭和 23 年

久呂保中学校新校舎落成

昭和 27 年

再び久呂保中学校新校舎落成

昭和 32 年

糸之瀬中学校新校舎落成

昭和 33 年

糸之瀬村と久呂保村が合併し昭和村が発足

平成 2 年

昭和村立東中学校と昭和村立南中学校が統合し、昭和村立昭和中学校が発足。

糸之瀬村久呂保村が合併したが後も旧村意識が残っていた。真に一つの昭和村となるために、中学校の統合が必要であった。

特記事項

- ・終戦後、戦争の反省から、人間尊重、真理と正義の希求、公共の精神の尊重に基づいた、豊かな人間性と創造性を備えた人間の育成を求める教育への渴望が感じられる。
終戦直後から、小学校の一部を転用したり、旧兵舎を転用したりして、新しい教育理念に基づく新制中学校をスタートさせた。
- ・昭和村を一つにまとめたいという願いから中学校の統合がなされた。学校制度が村づくりに大きく関わるのが感じられる。

昭和村立学校の歴史から学んだこと

1, 明治5年の学制頒布により村立小学校設置

文明開化により、国民皆学を理念とし全国に小学校を設置する制度ができた。

小学校の設立・運営には財政的負担が大きかったが、村の将来を担う人材の育成のため、村は相当な金額を捻出した。一方、村民も校舎建築に住民の寄付を集めたり授業料を徴収するなどして村民皆学に向けて一致団結し、村当局と協力して小学校を設立した。また、その後の校舎移転・新築、分校設置でも、村費で叶わない場合は住民の寄付を集めて学校建築を実現した。

知識レベルを高めて生活を良くしようという意欲が感じられる。

2, 学校は地区民の心のより所

交通未発達時代、近くに学校が欲しいという思いから各地に分校が設置された。分校設置にも地区住民の寄付が集められた。

分校を含め、学校は地区の文化の拠点となり、様々な活動の中心として機能してきた。学校は、地区民の心のより所となっていた。

3, 学校統廃合へ思い

昭和村では今までに、糸井小学校・貝野瀬小学校の統合、川額小学校・森下小学校・椋久保小学校の統合、糸之瀬中学校・久呂保中学校の統合、貝野瀬分校廃止・本校に合流、生越分校廃止・本校に合流、赤城分校廃止・本校に合流、永井分校廃止・本校に合流、等の学校統合があった。

学校統合に際し、居住区に学校が無くなる事への不安、学校統合による不利益への危惧から、数々の難題があったが、住民の努力で乗り越え、統合校をより良い学校へと押し上げてきた。

◎学校設置に対する過去の村民感情に思いを馳せると、学校が地区民にとっていかに大切なものかがわかる。学校統合に当たっては、それぞれの学区の人々の思いを大切に引き継ぎ、より良い学校へ発展させなければならないと切に思う。